



500人の想いをひとつにし黙祷を捧げた=9日 (photo: Koike)

「私たちは忘れない」

2011年3月11日の東日本大震災から間もなく3年——。9日、マンハッタン区アップパーウエストにある教会で、こどももまた追悼式典「TOGETHER FOR 3.11」が行われた。会場には在ニューヨークの邦人を中心に約500人が集まり、震災で命を落とした人、今もなお行方不明の人、家族や友人そして故郷を失くした人たちに心を寄せ、祈りを捧げた。私たちは今も、これからも、「ずっと忘れない」という思いと共に。

在ニューヨーク日本国総領事・大使の草賀純男氏は、震災発生以来、米軍が日本に対して行ってきた「トモダチ作戦」に謝意を述べるとともに、「私たちも、できる限りの支援をこれからもニューヨークか

ら続けていく」と力強く宣言した。

ニューヨーク福島県人会会長の藤田小夜子氏は「ニューヨークだけではなく、世界中の人々が祈っている。『想定外の惨事だった』と言うが、自然を人間が想定すること自体が奢り」であるとし、今後のあり方を考える必要性を訴えた。

式典では、被災地からのビデオメッセージも上映された。宮城県名取市議会議員の荒川洋平氏は、2年以上仮設住宅で暮らしているというある高齢女性の「元の場所に戻りたい」という心からの声を拾い、「日本は東京オリンピックで沸いているが、国の対策など気になる点もある。しかし、自分たちで立ち上がらないといけない時が来ているとも感じる」と、

あれから3年—— NY各地で東日本大震災追悼式典

復興が進まない、さら地のままの被災地を背に伝えた。

また、福島県相馬市みなと保育園の園児たちが「僕らを育てたこの町に虹を架けよう。僕らが大好きな東北に虹を架け

よう」とカー杯歌い、「ニューヨークのみなさん、いつもありがとう。これからも頑張ります」と手を振る姿に、涙を拭う参列者の姿があちこちで見られた。

新たな支援の必要性伝える



ほうほう会主催 東日本大震災追悼式典で歌声を披露する「とも」混声合唱団。中央はマイク白田氏=9日 (photo: Mori)

マンハッタン区ミッドタウンにあるニューヨーク日系人会館でも9日、ほうほう会主催の2014年の東日本大震災追悼式典が行われた。式典では震災犠牲者への祈りだけでなく、初めて被災地とのインターネット生中継が行われ、被災地の人々が抱えるさまざまな心情と現状、そして今後の復興に必要とされる支援について伝えられた。

式典の第1部では、岩手県人会の藤島誠氏が陸前高田市にあるコミュニティカフェ「りくカフェ」での話を紹介。同氏は、行政や専門機関による支援が仮設住宅の住民と自宅に残った人を差別化し、地域のつながりを壊しつつあると語った。加えて、集合住宅の建設や孤独死の

定義付け、被災者にまん延しつつある復興意識に対する疲れも伝えた。

その一方で、物質的な不足や生活上の不便さはなくなったこと、仮設住宅での暮らしに快適さや連帯感を感じている人々にも注目し、復興に必要な支援の変化を式典参列者に提議した。

第2部では、マイク白田氏が自ら被災地に赴き作曲した鎮魂歌を、「とも混声合唱団」が披露。震災で犠牲になった人々への祈りを込めて歌われた。式典の締めくくりには懇親会が開かれ、東北ゆかりの日本酒やつまみが無料で提供された。

ほうほう会は福島、宮城、岩手を含む東北6県の県人会と北海道ゆかりの会で構成されている。